

社会福祉法人  
ミッドナイトミッションのぞみ会

2018/12/1 No.79

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会  
本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

**福祉施設長には資格が必要ではないか**  
—のぞみ会における施設長達の在り方—



常務理事  
井本 義孝

のぞみ会には望みの

門学園（以下望みの門

を略す）楽生園、紫苑荘、富士見の里、かずさの里、方舟乳児園、木下記念学園など第一種社会福祉施設七箇所。第二種社会福祉施設として新生舎、中核地域生活支援センター、津ふくしネット、デイサービスセンター、グレースホーム、訪問看護ステーション、ホームヘルパー事業所、ヨカデイサービスセンター、児童家庭支援センター、ピアターパンの家など十二事業所がある。公益施設として望みの門ハイム、富津地区地域包括支援センター、在宅サービスセンター、福祉学校、など九事業所が存在する。施設及び事業所には九名の管理者がいて、計二十八名の施設長及び管理者が存在する。

施設ではないが法人運営に不可欠の事務局があり、事務局長を筆頭に組織全体の実務を担っている。そして約三〇〇名以上の職員が大別して入所部門と相談などサービス部門に分かれている。利用者の皆様は入所部門に約三〇〇名、通所部門に約一〇〇名、その他不

特定多数のクライアント（相談を必要として利用されるユーザーに対していかに良質、安価なサービスを提供できるか、常にこのことに心を砕いているのは言うまでもなく施設長たち管理者であり、運営責任者として業務に従事している。

つまり全職員のおよそ十%が運営管理の責任者として従事しているが、本人の自覚、そしてあくなき努力が期待されることは当然であり、これらはひとり、のぞみ会ならず超少子、超高齢社会を迎えている日本全体の福祉施設の課題でもある。

そこで全国社会福祉協議会では昭和五十四年から、福祉施設長の練磨向上を目指し一年間の通信教育制度を創設し、修了者に対し福祉施設士なる称号を授与してきた。現在のぞみ会には受講中も含め、十三名が存在し、全国で一、一〇〇名の現役が中心となり全体で、有資格者は六、〇〇〇名存在している。千葉県では現在五十名が会員として活躍している。

本法人は本年一都十県の関東ブロック大会を当番県として担当した。本法人の施設長は大半が福祉施設士資格を有しており、本大会担当県であったため、大会実行委員長をはじめとして多忙な中よく献身奉仕された。十四回に及ぶ実行委員会の協議の結果、本大会は主題として「地域共生社会における福祉施設

長には国家資格が必要ではないか——縦割り型の分野統合に向かう中で私たちに期待されるものとして去る十一月一日、二日にかいホテルスプリングス幕張において平成三十二年第三十一回関東甲信越静岡関東ブロック千葉大会が開催された。

幸い秋晴れの好天に恵まれ一五〇名余の関係者が参加され、著名講師である「潮谷義子、田島誠一、市川一宏、阿部志郎」諸先生のご講演をはじめ、心友会及びローゼンビラ藤原の二施設から実践報告があり、誠に意義ある大会となった。

アンケートには参加一五〇名中八十名の回答があった。その内顕著な二例を挙げる。

その1「地域共生社会の実現において施設長は一施設の長にとどまらず地域連携のプロとしての役割が求められていると思います。地域をつなげられるのは福祉の枠を飛び越えた施設長でなければ出来ないことと思っています。専門職としての公的位置づけは地域の人々への安心感につながるものとして施設士会で進めていくものと感じます。」

その2「施設長の資格はいわゆる国とか誰かが認めるライセンスのことではないような気がします。(人)として(リーダー)として相応しいということは何かということ職員など民意は求めるのです。そのために学び続けるという姿勢が、施設長という職の責任の

取り方と思うので団体としてその資格に価値をつけてほしいのです。」等々アンケート八十件のうち五十三名の会員が積極的に評価しており今後の本会活動にとりよき示唆が得られたと言っても過言ではないと思われます。望みの門に集う三十名の管理者中、十二名は施設長であり、本法人の運営上多大の貢献をなすものとして大いに期待されよう。のぞみ会は創立以来五十六年を経過し現在多種別多機能の「揺り籠から墓場まで」の総合福祉施設として存在する。平成三十年第三十一回大会は本法人にとっても大いに意義あるものであったと言えよう。

**児童心理治療施設 望みの門木下記念学園  
木下記念学園に着任して**

児童心理治療施設 望みの門木下記念学園  
医務監 古関啓二郎



この十月から、常勤で木下記念学園に来させて頂きました。

二年以上前、開園の前からいろいろお話を伺い、お手伝いをさせて頂いておりました。まず、医師を探すために、あちらこちらに話を持って行ったのですが、やはり児童精神科の専門医は数も少なく、

施設勤務希望者を見つけることはできませんでした。そこで、やむを得ず、開業に際して、私が院長をしていた木更津病院から、非常勤医として私を含め四人の医師に出張してもらいました。

それから二年が経ち、井本常務からたびたびお誘いを受けたのですが、精神科医ではあっても児童が専門でないため、なかなか踏み切れませんでした。院長を辞めたので、あとは外来患者さんだけと向きあっていこうと考えたのです。

考えを改めたのは、院長を辞めて暫くして、やや元気を回復したのでしょうか、再度井本常務からお誘いがあったのと、こんな私でももう一度勉強し直せば、児童精神科もできるかもしれないと思いたったからです。年齢も顧みず、意欲的になったのです。

六月から、毎週一回来させて頂き、十月からは週四日来て本気に取り組んでいるのです。が、あらためて児童の心の問題の深刻さに驚き、この心理治療施設の重要性を強く認識させられました。まだ、わずかの時間ですが文献や本から学んでいるところです。

この木下記念学園の子供たちは、いわば重複障害の患者さんたちと言えそうです。精神科で扱う問題は、脳の問題と、心の問題の二つがあります。児童の分野では、注意欠如多動障害と自閉症スペクトラム障害は脳の発達

上の欠陥と考えられています。一方、この木下学園の子供たちは虐待にさらされてきた子供が多く、その虐待から派生した愛着障害や心的外傷後ストレス障害といった心の成長を阻害する疾患がみられます。

こうした脳の病気、心の病気の両方を重ねて持っている子供たちが、この木下記念学園の子供たちなのです。大変な子供たちですが、明らかに良くなっています。木下記念学園のスタッフと学校の先生方の努力のたまものです。今回、スタッフの働きを間近で見て、私は大変、楽観的になりました。若く熱心な若者（古い表現！）が多くいて、そのケアで子供たちは回復しています。

私は、木下記念学園を好きになりつつあります。さらに大きなお手伝いができるよう考えていますし、折ってもあります。どうぞ、よろしくお願いいたします。

## 東京望みの門 自立援助ホーム マナの家 六十八歳の年生 母からのバトン

生活指導員 尾家 美穂

いつ頃からだろう。季節を短く感じ、一年が猛スピードで流れていくと感じる様になったのは…。シニア世代と呼ばれ、白髪もシワも増え鏡をゆっくり見る事も少なくなりました。

二十年続く日課、飼い犬との朝夕の散歩のお陰で足腰は鍛えられ、体力は衰えてはいない。ガーデニングや趣味、雑用に追われ、慌ただしく一日が暮れていく。それはそれで満足しているが、何か物足りない…。

そんな時でした。酷暑の中、一本の電話が鳴り「美穂ちゃん、遊んでいるなら助けてくれない？」電話の主は東京望みの門施設長の目黒さんからでした。彼女は姉の親友で私を高校生の時から知る旧知の間柄です。私でお役に立てるかどうかも解らないまま、直ぐにお引き受ける返事をしていました。

というのも、五年前に九十二歳で亡くなった母が最期に言い残した言葉が頭をよぎったからです。私の手を握り「私はもうこんな体になって、神様の御用ができなくなったわ。後は若い人に任せるのでお願いね」一方的でしたが、この約束を私は果たせていませんでした。母は八十年代後半迄、教会の方達に加わり、病院やハンセン病療養所長島愛生園を訪ね、奉



仕させて頂きました。電話をもらった時、やっと私も神様のお役に立つ人になれる。ピカピカの一年生だ。

その思いが久々に気分を高揚させました。この年で履歴書を書く日が来るなんて…と思いつつ、半世紀以上に及ぶ自分の人生を振り返る貴重な時間を持てました。

若い寮生たちとの触れ合いの中で、今まで知らなかった世界を見聞したり、驚く事も多い日々ですが、一緒に成長していけたらと思っています。

寮生やシェルターに入ってくる人達、退寮生の人達。それぞれが、一人では処理できない大きな悩みや問題を抱え、押しつぶされそうになる気持ちと闘いながら、この門を入りしています。与えられた居場所で微力ながらも、お手伝いできることに感謝をしています。

## 婦人保護施設 望みの門学園 研修旅行に行ってきました

作業指導員 吉田 恵子

今年十月十日から二泊三日で東京、神奈川方面の旅でした。何日も前から準備をし、期待に胸をふくらませ、唄好きな、ベテランガイドさんの案内で旅のスタートです。

一日目、スカイツリー、浅草、その後、はとバスコースを車窓から……。二日目、高尾山、鎌倉。三日目、横須賀軍港めぐり、横浜中華街、各々、観光地では、ゆりのある時間で過ごすことが出来て良かったのですが、スカイツリー、浅草は、平日にも関わらず大勢の人で混み合い、浅草の自由散策の中でお二人の利用者が集合時間になっても戻って来ません。職員で手分けして探したのですが、中々見つかりません。一時間後、やっと園長が雷門の下に立っているところを見つけました。その二人がバスに乗って来られた時、待っていた皆が「良かったね」と大きな拍手で迎えた場面は、本当に皆さんが心配していたことが伝わり、心が温かくなりました。彼女達はとても心細い思いをした事でしょう。



「災い転じて福となす」

その後の行動は全く問題なく、おかげで学園のチームワークがさらに良くなったという「災い転じて福となす」のことわざを身をもって学習させて頂きました。

宿では温泉とご馳走を満喫しました。食後はカラオケで大盛り上がり、職員も一緒になってマイクの奪い合いです。

あつと言う間の三日間でした。全員、無事に帰園する事が出来て本当に良かったと思いました。

学園で生活されている皆さんは、日頃から色々とお悩みや、ストレス、苦しい事もあるかもしれません。この一年に一度全員で出かける旅行の持つ力は、心のやすらぎや、癒しとなり、明日からもまたまた頑張ろうと私たちを立ち上がらせてくれるものです。

ちなみに一番楽しんで元気を頂いたのは、もちろん私です。

養護老人ホーム 望みの門楽生園

**信頼関係とは**

支援員 福本 剛大

望みの門楽生園に勤務して早、一年半が立ちました。その間、介護初任者研修を通じて基礎的知識・技術を学ぶ機会を頂きました。しかし、実際に支援員としてのご利用者との

関わりの中で、性格や態度・症状や状態・認知度などの違い、表現の難しい方の心を推察し、苦しみや痛みから解放する上でもご利用者一人一人に対してコミュニケーションの取り方を変えていき対応して行かなければいけません。ご利用者は高齢で、視覚、聴覚や言語能力の低下、認知症のため意志の疎通が図れず支援していく上で重要な役割であるコミュニケーションの難しさに直面しました。

上司に相談すると「自分自身に問題がないのか、利用者の方に声を掛けられた時に業務に追われ無表情になっていないか、相手を見ないで話していないか?ご利用者の方はあなたの表情、言動を良く見ていますよ。仕事でも手を止め心を止め相手に向き合うことで気持ち・感じることであり、ご利用者の方が困っている時に対応できないと到底、信頼関係は築くことはできない」とのアドバイスを頂きました。自分自身の言動に対して振り返り、実践する中で身振り手振りや筆談、視線・身だしなみを試行錯誤する中でコミュニケーションとは、相手を観察し関心を抱く。相手と



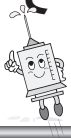
の共通点を見つける。相手の気持ちを受容する。挨拶等の場面においても名前を呼んでから挨拶する。

相互に信頼する関係を結ぶことがコミュニケーションであるところ利用者の方との関わりを通じて教えて頂きました。

今後は、この教えを基に様々な方とのコミュニケーションを通じて一步一步見据えてコミュニケーションの輪を広げて心穏やかに施設生活を送られるように不器用ながらも相手に心から寄り添い、信頼関係を築ける支援員になれるようにコミュニケーション能力の向上に努力したいと想います。

特別養護老人ホーム 望みの門紫苑荘

健康管理室について



富津健康管理室室長 及川 貴子

健康管理室室長の及川です。室長に任命され、七カ月経ちました。まだまだ仕事に慣れず戸惑う事ばかりで、健康管理室の看護師の皆様、医務担当の皆様には、ご協力本当に感謝しております。

さて皆さん、健康管理室の仕事をご存知でしょうか？ 健康管理する所？ 正解です。

健康管理室は、職員や施設の利用者様の健康を管理するのが目的です。皆様の職場の看

護師は、健康管理室からの派遣となっていています。私は紫苑荘に所属しております。それぞれが、看護師としての責任をもって利用者様、職員の皆様の健康管理を行っています。



健康管理室は、春には健康診断、十一月にはインフルエンザの予防接種、夜勤者健診等を企画し実行しています。健康診断は職員、利用者様の健康のバロメーターを知る検査なのです。健康診断や、インフルエンザの予防接種を嫌がる方が多いですが、職員の皆様の健康を知る上での事ですので、ご協力お願いいたします。

そういう私は、注射が大の苦手です。健康診断の採血なんて自分が刺されているのは絶対に見ることが出来ません。ですが……注射をするのは割と得意です。

インフルエンザの予防接種も、怖くて始まりません。しかし、怖がってばかりいても始まらないので、怖がらない素振り、涼しい顔をして現場で仕事をしています。

また今後、健康管理室は風通しの良い環境を目指していきたいと考えております。

健康上困った事等、また職場で感染症についての対応等わからない時には、気軽に相談ができる場所という感じで健康管理室の事を思っていたら良いと思います。

まだまだ慣れない事が多いですが、皆様のご指導を頂きながら成長していきたいと思っておりますので、今後とも、宜しくお願い致します。

特別養護老人ホーム 望みの門富士見の里

これからの生き方について

介護員 嶋野 正子

私は介護という仕事をしている事もあり、自分が歳をとったら認知症になってしまうな



いかと、不安になる時がありました。

認知症の方が、二〇二〇年には三二五万人まで増加し、認知症の前段階である軽度認知障害(MCI)の六割が三年以内に認知症を発症するという検査結果が大学等の研究機関より出ているそうです。「なったら治らない」そんな風に自分でも思い諦めていました。

そんなある日、テレビを観ていて衝撃を受けました。「初期のアルツハイマー型認知症の九割の症状が改善」「五〇〇人以上が回復」二〇一七年アメリカ、カルフォルニア大学ロサンゼルス校のデール・ブレデセン博士が提唱する「リコード法」という治療法の事を言っていました。とても気になり調べました。認知症はアミロベーターという脳のゴミが蓄積し、発症すると言われています。実は診断される二〇年前から発症しており、四〇代頃から発症している恐れがあります。早期発見のカギは物忘れや、匂いが分からなくなる事で、四〇代から生活習慣を見直す事が大事だそうです。アルツハイマー病は、三十六の原因からなっている事がわかっており、リコード法ではその原因一つ一つを生活習慣によって改善していく治療法だそうです。しかし、医療機関も限られており、費用も保険適用外の為、病院にかかってまでもと思う人が多いので

はないでしょうか。今は、日常生活を見直していく事で改善するならば、行ってみるべきかなと思います。

私も認知症の予防としてリコード法を行う事に行ってみました。ポイントは食事、運動、睡眠です。三か月程経ちましたが、成果は少しずつ出てきていると思います。この成果を入居者様の認知症の改善に繋げていけたらと思います、そして、日本も早く保険適応になってくれたら、楽になる方が増えるのではないかと思います。

最後に、三階にクリスマスの飾り付けをしたので、写真で紹介いたします。

老人サービス事業 望みの門 サービスセンター

**おやつを楽しく**



介護員 山本 忍

私が望みの門デイサービスで働くようになって一年五ヶ月が経ちました。

初めて福祉の仕事をするようになり、覚えることが多く毎日不安でしたが、一緒に働く先輩方に教えていただき、助けていただきながら少しずつ仕事を覚えていきました。

働き始めて数ヶ月は、時間に追われ一日があっという間に終わってしまいました。今ではご利用者ひとり一人とコミュニケーション

を深めることができ、笑顔が増えた時は楽しい時間を過ごしていただいていると自分自身嬉しく思い、介護員としてのやりがいを感じました。職員で月に二回ほど、ご利用者様と一緒に作る「手作りおやつの日」を行っています。色々な食事形態の方がいらっしゃいますが、皆様が食べられる季節に合わせたメニューを考えています。丸めたり焼いたりすることもあります。中には「できない。やって」とおっしゃるご利用者の方には声かけし手を添えて一緒に作っています。

でき上がったおやつは人それぞれでボリュームがあって大きい人、少し遠慮して小さい人などご利用者の性格がでるおやつになります。時には職員も一緒に食べます。いつものおやつより笑顔が増えて同席のご利用者との会話も弾んでいきます。

最近では「今日のおやつは何を作るの？楽しみ」と言っていただけできるようになりました。

「おいしかった」と笑顔での



お言葉が励みになりとても嬉しく感じます。おやつ作りだけではなく、デイサービスで楽しく時間を過ごしていただけるよう創作など一緒に取り組める活動をしていきたいと思っています。

今後も笑顔を忘れずに寄り添ったサービスの提供に努めます。

### 特定指定相談支援事業所 望みの門へTEL 毎日鳴り始めた携帯電話

管理者 森 和浩

四月から相談支援事業所の管理者として地域で生活する障害をお持ちの方の相談支援を担当して既に半年が過ぎました。これまで望みの門へTELは主に新生舎とグレースホームの利用者の相談支援を担当していましたが今年から法人外部の相談も受け始めついに本格稼働となった訳です。

担当者は一人ですから多くの相談としてはなかなか機能できないものの身近な方からの相談や近隣に住む障害をお持ちの方からの相談が毎月のように来ています。「生活保護を受給しているが日中何もしないで生活するの嫌だから何か活動できる場所はないですか?」という相談や「施設を卒業して地域で生活したい!」「特別支援学校を卒業してグ

ループホームで暮らしたい!」と現在の自分から一步乗り出そうとする大きな希望を持った相談が飛び込んできます。各支援機関と連絡を取り合い訪問して本人のアセスメントを実施し、本人の希望と現実を対比した上で今取り組める事と将来に向けたプログラムを描くことが求められます。

描いた通り、思った通りの進路としてはなかなかありませんが新しい生活の始まりに胸を踊らせる利用者や毎日笑顔で取り組む姿を見ると携わったことへの喜びが湧きその人との信頼も深まります。勿論良い事ばかりではありません。期待通りにならずまた新しく支援計画を組み立て直すこともあるわけですが本人の将来への希望を受け止めどう対応していくか相談員としての手腕が求められることとなります。

障害と言っても身体障害・精神障害の他に発達障害や難病まで含まれ様々なケースに対応していかなければならないことや福祉サービスはもとより介護保険といった分野まで理解しながら相談に乗るなど幅広い知識とネットワークが必要となり、まだまだ駆け出しの自分にとっては緊張の続く日々というのが実状です。ともあれ四月当初は月に二、三回鳴れば良い方だった携帯電話が現在では毎日のように鳴り響き、今日は〇〇市にモニタリング訪問五件、明日は特別支援学校の進路移行

会議、来週はケース会議が二件でその後相談支援事業所連絡会が十六時から、と毎日あちらこちらに出向く日々となりました。地域からの相談は今後も増え続けることと思えますが定規で測ったような相談支援ではなく相談に来た利用者本人の定規で将来を共に歩んでいけるような相談支援としたいものです。「望みの門へTELに電話してみな。なんとかなっぺよ!」と言われるような相談支援事業所になりたいものです。

障害福祉サービスについてのご相談はこちらです。お気軽にお電話ください。皆様からの相談をお待ちしています。  
〇九〇—四九一八—六二〇二

### 共同生活援助事業 グレースホーム

## 蓋を開けると...



世話人 齊藤 房子

炊飯器の蓋を開けると湯気と一緒に炊きたての暖かいご飯の匂い…。お腹の虫が一気にグーッと鳴ります。

「今日のご飯なあに?」

「おかずは…」

「やったー、ハンバーグ!」

「いいね。たまにはもつ煮込み。」

ご飯の時間は毎日賑やか。作業で失敗して

しょんぼりしていた顔もちょっと元気になったようです。ご飯を喜ぶ利用者さん、それを見て嬉しくなる世話人。ご飯の蓋を開けた瞬間はみんなが笑顔になる



私が障害者支援の蓋を開けたのが五年前、そろそろ六年です。最初は恐る恐る、そして不安だらけで介護と支援の違いに戸惑う毎日でした。怒ったり泣いたり、笑ったりけんかしたりと、どこの家庭でもある出来事、同じことの繰り返しのように全く違う毎日。そんな私が最近は何々しくなったのか、少々のことでは慌てなくなりました。

やっと利用者さんと正面で向き合える様になったのかな？ やっと見守れるお母さんになれたのかな？

利用者さんにとってここは我が家。安心の場であり安全な場所。一人ひとり個性があり障害の度合いも違うので、それぞれに合った支援をしていく…。そう、障害者支援の蓋を

開けてからやっとここまで私も成長してきました。まだまだ奥が深く、もっともっと勉強していきたいと思っています。

「ピ〜ッ」

あ、ご飯が炊けました。今日も蓋を開けると湯気と一緒に炊きたたのご飯の匂い、そしてみんなの笑顔。

さあ、ご飯にしましょう！

笑顔で始まり笑顔で終わる毎日。この小さな幸福がいつまでも続きますように…。

地域活動支援センター望みの門ヨカデイサービスセンター

毎月のお楽しみ



管理者 三幣 知子

ヨカデイサービスセンターでは毎月一回調理実習を行っています。利用者さんと一緒にその日のお昼ご飯を作るのですが、まずはメニューを決めるところから。数日前に何が食べたいか皆さんに聞きます。メインからデザートまで直ぐ



に決まる月もあればなかなか決まらず職員が案を出すことも。次に食材の買い物。前日にちょっとしたドライブも兼ねてスーパーへ必要な食材を買いに出かけます。商品を持ってくる人、カートを押す人、袋詰め、荷物を持つなどそれぞれ役割が自然と決まります。お店に行くと季節の野菜や美味しそうなお惣菜など、見て回るだけでも帰ってからの話の種類になります。

調理実習当日は下ゆでなど時間のかかる物は朝の内に職員が準備。入浴が終わると調理開始です。エプロンを着け手洗い・消毒。

利用者さんの中には煮物からみそ汁まで一人で作ってしまう人もいます。周りの利用者さんにも好評で本人の得意とするところでもあります。調理に入ると野菜の皮をむく人の出番。ピーラーを使い人参や大根を上手にむきパトントンタッチ。包丁を操る人も何人かいるので手分けして切ります。多少の不揃いにご愛敬。食器を準備する利用者さんは今日の献立に必要なのは箸、それともフォーク？と考えて職員に必要な物を聞いてきます。

中には自主的に洗う物をしてくれる人もいて皆さん何かしら調理に関わりお昼ご飯を作っています。もちろん盛りつけ配膳もやりますよ。短い時間でバタバタしてしまう時もあります。全員で作ったご飯は多少失敗してもとっても美味しいです。



食後は「美味しかった！」の声と「来月は何にする？」はお決まりの言葉。さて、何にしましょうか……悩むところです。

### 千葉県中核地域生活支援センター 君津ふくしネット 「望みの門」に勤めて

相談支援員 並木 美幸

私は今年の八月二十一日に望みの門に入職し、君津ふくしネットに配属となりました。生活困窮者支援事業担当として、君津市役所内にある「生活自立支援センターきみつ」にて働き始めました。今まで看護師をしておりその経験を活かし人と接する仕事がしたいと思い相談支援員を希望いたしました。

当センターは主に生活困窮者の就労・生活支援をしています、そのため私が思う以上に複雑な背景を抱えている方が多く来所されます。先日相談に来られた方のお話ですが、来所時は当面の生活資金がなく持病の治療ができないと暗い表情でした。すぐにハローワークや社会福祉協議会と連絡を取り貸付資金の請求をし、市役所厚生課に住居確保給付金の請求の手はずも整える事ができました。帰りに、「ありがとうございます」と笑顔を見せてくださいました。

相談者を私一人で抱える必要はなく、先輩

方にアドバイスをもらったり、他機関との連携によってその方に必要な方法を整えていくことがより良い支援に繋がりました。笑顔に繋がっていくと学んだ一事例でした。

十一月、初めて参加させていただいた感謝祭は素晴らしいイベントでした。私は輪投げブースを担当させていただきました。かずさの里のこども達と接する中で感じた事はみんな笑顔で人懐っこいという事です。お客さんとして来られる方も笑顔、その笑顔につられて提供側の私もワクワクし楽しい時間を過ごさせて頂きました。この笑顔の連鎖こそ、望みの門が永い歴史の中で築いてきたものなだと感銘を受けました。

まだまだ未熟な私ですが、この教えを根底に相談に来られる方がいずれ笑顔になっていただけるよう専心し、しっかりと向き合い支援をしていきたいと思えます。

### 富津市富津地区地域包括支援センター 今私が思う相談支援とは

相談支援員 長谷川佳子

猛暑続き真ただ中の八月に入職し、ハツと気が付けば長袖の季節になっていました。富津地区地域包括支援センターに配属になり四ヶ月。新しい仕事に疲労困憊というよりも



日々勉強の中にも充実感・達成感があり、本当に月日が早く過ぎていきます。

私は以前、数力所の高齢者施設で介護職員として働いていましたが、第一子出産を控え、一年間の育児休業取得予定だったことをきっかけに、育児という暇になるであろう時間を、お金になるものにした(資格取得し給料アップ!)という安易な考えと、新聞やニュース、TVでしか見たことがないような世界を覗いてみたい!という、興味本位でしかない不純な動機で、社会福祉士資格取得を目指し始めました。臨月に入り、お腹もばんばんになった頃に通信制大学から莫大な量の教材が届き、不安が募ります。無事に子供を産みましたが、赤ちゃんというものが結構寝ない。遊んであげなきゃ大泣きする。思っていた以上に手がかかる。ということ、私の勉強時間は子供を寝かせてからの夜間、安易で不純な動機のもと資格取得を目指したことに後悔

したのも早かったです。その後は家族の協力を得て(時々夫に八つ当たりしながら)、なんとか無事に受験突破し、今のお仕事に就くことが出来ました。

いざ仕事を開始すると、一見、私が想像していたような『見たことがない世界』が広がっているように見えるのですが、相談支援を通して、クライエント・家族・関係する方々と顔を合わせ、会話を重ねていくことに、それぞれの考え、生き方があり、どうしても理解できないようなことは何もないということがわかってきました。それよりも、色々な人の考え方、価値観があり、それらを元に多くの形式の生活がある。その生活の中で困っている人が居る。このことを常に忘れずに、自分の中で考える正当性を押し付けてはいけなさと肝に銘じ、多くのコミュニケーションをとりながら、一緒になって解決への道を模索し、より多くのクライエント・家族と『安心感』を共有していきたいと思っています。

## 児童養護施設 望みの門かずさの里 感謝祭を終えて



施設長 戸波 宏幸

十一月三日(文化の日)恒例の「かずさの里感謝祭」が催され、盛況の内に終えること

ができました。

開設十二年を終えるこの月、十二回目の感謝祭には、自身様々な思いが交錯しました。思うと、年男(成年)でかずさの里の誕生を担う中、「十二年後の年男にはどんな里が築かれているのだろうか」責任の重さに負けまいと、傍観的な思い問いかけを自身にしておりました。

お陰様にて人並みに還暦を迎え、かずさの里へ十二歳!感謝祭の渦中に身を置くことが出来ました。

模擬店にて明るく汗かく子ども・卒園生に、里の息吹を感じ安堵しながら、改めて地域の方々への感謝の思いを募らせました。同時に、この感謝祭に合わせ恒例とした「卒園生の会」に顔を見せた九名の大きな子どもたちの姿に、勝手ながら健康的な里の歩みを顧みることができました。

反省会を兼ねた夕方の集いでは、「この一年、また髪白くなった?」「あの時の俺の気持ち解っていた?」等々の投げかけに閉まれます。互いに懐かしさ、ほろ苦さ、心地良さを憶えながらの一杯は、毎年格別のものになります。日中は地域へ感謝し、夕は健やかに育った子どもたちへの感謝、十一月三日は回を重ねる毎に、特別な気持ち湧きだします。

感謝祭を始めた数年は、子育てに自身ありきとは言えませんでした。子どもも大人(職

員)も地域の方々にご迷惑をかける事も多く、体裁を整える子育てに甘んじた時期でもありませんでした。

専門職として励む「子育て」の冠に負けそうになる中で、火を灯してくれたのは、感謝祭に集ってくれる卒園生の素直な語りであったように感じます。

「最近大人(職員)の回転(入退職)早すぎるよ!」ずっと居て欲しいのに!」この素直で厳しい言葉の奥にある思いを必死に受け止めました。「養育の専門は、まず居続けること:」に気づかされ、本音も建て前も無く子どもたちと向き合う歩みが始まりました。

法人の業であり、かずさの里の大切な子育てである感謝祭の歩み、重みを改めて胸に刻みたいと思います。

まずは、新たな元号となる来年の感謝祭まで、業として、人として「里の親父」をしっかり演じることを肝に銘じます。



乳児院 望みの門方舟乳児園  
**育つ環境の大切さ**



保育士 石井 弘美

方舟での仕事を始めて半年余りが経ちました。年齢だけはベテランですが保育士としてはまだやっと五年程の経験を積んだだけで、正職員として就くのも方舟が初めてです。

若い時は全く関心のなかつた保育士の資格を取り、乳児院で働いてみたいと思ったのは、テレビで目にしたある事件がきっかけの一つでした。二十歳位の青年が偽装結婚をしていた女性を手にかけたのですが、その青年の生後間もない姿がテレビに映ったのです。



がまさに玉のような赤ちゃんでした。このまだ瞳も十分に開いていない赤ちゃんが、この先何を見てどのような経験をして今回の出来事に至ったのだろ

う、善き心が育つかどうかの分岐点はどこなんだろう…と考えてしまったのです。

分岐点の一つの大きなものではなくて、日々のちょっとしたマイナスの経験が積み重なったものかもしれない。でも成長する中で自らの心を見失っていくような、どんな環境が存在したのだろうかと青年の生い立ちに思いが至りました。生れ落ちる環境を選べない以上、自分も含めて誰にでもそうなる可能性はあるのだと感じています。



玉のような赤ちゃんが、そのまま周囲の環境を信頼して育っていきけること。方舟で生活する子どもたちの背景は様々ですが、一人一人と接する度に信頼に値する一員となれる様、その自覚を忘れないようにと思っています。

玉のような赤ちゃんが、そのまま周囲の環境を信頼して育っていきけること。方舟で生活する子どもたちの背景は様々ですが、一人一人と接する度に信頼に値する一員となれる様、その自覚を忘れないようにと思っています。



児童家庭支援センター 望みの門ピーターパンの家  
**反抗期**



心理相談員 齋藤 美紀

皆さんは、自分の反抗期のときのことをどう記憶していますか？私の反抗期は、とにかく干渉されたくない、ほっといてほしいというものでした。ムスツとした顔で「うるさい」とよく言っていたように思いますが、正直よく覚えていません。

思春期の私は自分のことを処理することに夢中で、親にどんな反抗をして、その親がどんな表情をしていたのか、まったく見えていなかったなと今は思うのです。

大学生のころ、母と反抗期のことについて話したことがあります。

母は「ほっとこうと思ったけど、あんまり何も言わないのもね。ほっとき過ぎて、私のことなんてどうでもいいんだと思われてもいけないと思って悩んだ。ほっといてと言う割に、見てほしいっていう気持ちがあるから」と、十四歳の娘をどう見ていたのかを話してくれました。

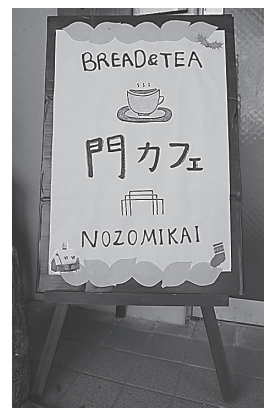
私はその時初めて、私の反抗期は母に見守られる中で行われ、母に受け入れてもらったからこそ静かに終わったのだということに気づきました。そして、母も悩むのだなという

当たり前前のごとに気づいたのでした。親も完璧じゃない。そう思うようになってからの方が、不思議ですが、楽に生きられました。ありがとうございました。

望みの門  
ピーターパン

の家では、子育て中の親御さんの話を聞かせていただく機会がたくさんあります。皆さん子どもの幸せや将来を思い、悩みながら生活しています。いつか子どもたちにそのことを伝えてほしいなど私は思います。親も悩み、迷うこと。そうやってあなたを育ててきたのだということ。

母が、父が、どんな人たちに支えられて今があるのか。失敗したことや、間違えたこと。もちろん、子育て中の喜びも、それ以外にも、それがいつかその子の力になると、私は思います。



のぞみ会では、この度「門カフェ」をオープンしました。認知症カフェの機能を持たせつつ、それだけに限定しない自由な憩いの場としていきます。お客様は飲み物と新生舎の焼き立てパンやお菓子などがご注文いただけます。介護、障がい、

子育て等々のお悩みを抱える人も、そうでなくただお茶を飲みにいらいっしやる方も子どもからお年寄りまでご利用いただけます。

そんな中で、のぞみ会の総合福祉施設である機能が活かされたり、地域の皆様の憩いの場や居場所として活用していただければ幸いです。



当面は、原則として毎月、第三水曜日の13時30分～15時30分の営業（利用料一名三〇〇円）としています。  
是非、一度覗いてみてください。

## 編集後記

本号第二面には、のぞみ会創立来初めて医務監として着任された古関啓二郎先生に玉稿を頂いた。先生には困難を抱えた子どもたちの医療面のサポートをお願いすることとなる。先生の尊い働きが主によって豊かに祝福されますように。ちなみに先生の勤務される望みの門木下記念学園からは東京湾に浮かぶ富士山に向かって沈んでいく「夕日」の美しさを毎日眺めることができる。そこで連想ゲーム。「夕日」「広島東洋カープ」「新生舎の大きな屋根」・答えはもうお分かりでしょうか。そう「赤」である。クリスマスカラーとして多くの人が赤と緑をイメージする。赤はイエスキリストが流した血を表し、さらにはキリストの愛と寛大さを示し、緑はクリスマスに飾るヒイラギなど針葉樹が一年中緑の姿を変えないところから永遠の生命の象徴としていそうである。師走の慌ただしい中、皆さまの上にもクリスマス喜びが大いに届きますように。